



Title	死について
Author(s)	松本, 圭史
Citation	癌と人. 1994, 21, p. 7-9
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/23907">https://hdl.handle.net/11094/23907</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 死について

松 本 圭 史\*

将来について予想をたててことを運ぶ人々は多いが、予想がはずれることはしばしばである。今から5年前に、自民党政権が崩壊し、土地が下落することを考えた人々は少ない。したがって、先のことは分からないと考える方が無難である。このように先のことは分からない我々にとって、明らかなことがある。それは、すべての人々は将来死亡するということである。元気に活躍していると忘れがちであるが、理論的には誰でも理解できることである。同時に死ぬ迄は大切に生きようということになる。現在の日本では、3人中1人は癌で死亡している。この紙面をかりて、この死について一緒に考えてみたい。

## 1. どのような病気で死亡するか

現在の日本では、約40%の人々は高血圧（動脈硬化）で、約30%の人々は癌で死亡している。大部分の人々は、以上の2疾患で死亡している。動脈硬化の場合は、その約半数は心臓病（心筋梗塞等）で、残りの約半数は脳卒中（脳梗塞と脳出血）で死亡する。新しいゴムのホースは弾力性があり通日も好いが、古くなると硬化して流れにくくなってつまり（梗塞）、また破れる（出血）。老人の動脈に硬化がおこり、高血圧、梗塞、出血が生じるのは当然と考えられる。また、全身の細胞も年をとると癌細胞になりやすいので、年をとると癌があちこちで発生するのは仕方がないと考えられている。

我々が外科手術をうける時は、外科医は出血を防ぐために動脈をくくって血流を止めて手術

をする。くくられた先の動脈から酸素や栄養を供給されている組織が死滅しないのは、近くの別の動脈から来る枝によって酸素と栄養の供給をうけるからである。このように、動脈と動脈とは枝でたがいに交流し、網の目状となり、血流が止まるという事故に対応している。心筋梗塞や脳卒中は、心や脳の動脈が動脈硬化等のためにつまり、その先の部分から酸素等を供給されている組織が死滅するために生じる病気である。心や脳では、その他の臓器のように動脈と動脈との連絡が充分に無いために発生する病気なのである。最も大切な心や脳の血管だけが致死的な病気をおこしやすいになっているのは、神の創造ミスであろうか。

人間を含めてあらゆる種は、すぐれた子孫を作ることによって維持されてきた。このためには、生殖年令をこえた老動物はむしろ無用である。したがって、生殖年令をこえた老動物は、心、脳疾患や癌によって死亡させることが必要となる。そのことによって、種は若がえり、種の勢力を維持することができる。老いても死亡しないような動物は種の維持が困難になり（現在の高齢化社会の多くの問題点はその一端を示している）、老いて死亡するような種が栄え、人にまで進化したのではないだろうか。以上のことから、すべての人に訪れる死は仕方がないと考えられる。そこで、どのような死があるかを考えてみよう。

## 2. 肺・心・脳機能の停止

従来から、殆どすべての人々によって認めら

\* 大阪大学名誉教授、大阪府立母子保健総合医療センター総長

れてきた死は、肺による呼吸、心搏動、脳機能のすべてが停止した状態である。

例えば、呼吸が停止すると、脳と心には酸素欠乏が生じるのでこれらの機能も間もなく停止する。脳機能が消失すると、呼吸運動は停止し(心は独自の力で数日から2、3ヶ月は搏動することが出来る)、心も酸素欠乏のために停止する。心が停止すると、肺と脳には酸素等が供給されないの、これらの機能も停止することによって、他の2つの臓器の機能が間もなく消失することによって生じる。脳・心・肺の機能がすべて消失すれば、死は確認されやすいし、医師でない人々にも死と確認されやすいので、世間からも問題なく受け入れられている。

### 3. 脳死

最近の医学・医療の進歩はめざましい。そのことによって、脳死という死が発生し、世間をさわがせている。脳死は、人工呼吸器の出現によって生じた死であり、それ以前には存在しなかった死である。現在の医師でも、もし人工呼吸器を使用しない所で働いていれば、脳死をみる体験は無い場合が多い。

脳障碍のために、脳の主要な機能がすべて消失したとしよう。その場合は呼吸中枢の機能も消失するので、肺による呼吸が停止し、酸素欠乏のために心も停止し死にいたる。この時に人工呼吸器を使用して肺の働きを代償して全身に酸素を運搬すると(同時に栄養も供給する)、心機能は維持されて(循環中枢の機能が消失しても、肺と相違し、心搏動は独自の力でしばらくの期間は維持される)、全身に酸素と栄養を供給する。これが脳死である。勿論、人工呼吸器が働いているから脳死の状態は維持されているのである。人工呼吸器を止めれば、自力で呼吸はできないので心の酸素欠乏は直ちに生じ、心搏動も停止するので従来から認められている

死にいたる。

複数の専門医師によって、現在の脳死判定基準にしたがって脳死と診断された場合は、1000例をこえる症例で追跡した結果でも生きかえった人はいない。人は考える動物であり、その脳がドロドロの状態である(人工呼吸器を動かすことによって、脳から下の臓器に酸素を供給し、脳以外の臓器を機能させている)。世界中の殆どの開発国では脳死は個体の死と認められており、脳死からの心・肝移植が実施されている。日本政府で作った脳死臨調でも、脳死は原則的に個体の死と認めた。以上のことから、脳死は個体の死と考えてもあまり問題はないようである。まもなく、日本でも脳死は個体の死と法的に認められ、脳死からの心・肝移植が開始されるであろう。海外における日本人の心・肝移植に対する批判にこたえることになるだろう。

### 4. 尊厳死、安楽死

脳死としばしば混同されているものに植物人間がある。植物人間には意識はなく、考えることも返答することもまったくできないが、呼吸運動も心搏動も維持されている。脳の高次中枢は死んでいるが、内蔵機能を維持する脳の自律中枢の部分は生きている状態で、植物人間は人工呼吸器等の機器の助けをかりなくても呼吸し心は搏動している。植物人間は明らかに死亡していない。

人間の生命は精神的・人格的なものであって、それゆえ尊重されるのであり、単なる生物的生命にすぎない肉体は眞の人間と呼ばれるに値しないとする人間観がある。このような考えに基づき、尊厳死という言葉は、「自分の生の終わりを自分自身で選択し、決定する」というときに用いられる。植物人間は死亡していないが、単なる生物的生命にすぎないので、自分の場合は特別に高度の治療をつづけないで死にたいと宣言しておくことである。

私の父親が植物人間になって数ヶ月が経過し

たでしょう。人格ある人にかえることはありえないので、医療をつづけないで自然に肉体的生命を終わらせてほしいと希望すれば、安楽死を望んでいることになる。

#### 5. 死にかたを自分自身で選択しよう

医学・医療の進歩・高度化はまことにすばらしいことである。しかし、あらゆる面で好いというような事柄は一般的に存在しない。このために、今までに無かった脳死という死が生じ、植物人間のような生物学的生命の存在が著増した。それらによって、社会に多くの混乱が生じた。多くの管によって、酸素、栄養等を与えられて肉体だけが生きるスパゲッティ症候群とよばれる患者を生んで、多額の医療費が使用されている。

脳死の場合に、1000万円をこえる無駄な医療費を使用しないで楽に死んでゆきたいと考える方々は、「脳死の状態になれば、直ちに人工呼

吸器を止めていただきたい。心・肝・腎が必要であれば移植に使ってもらっても好い」と生前から自分の意志を表明しておかれる必要がある。今日の日本の医療の現状から考えると、宣言がなければスパゲッティ症候群においやられる。医師の中に無駄な治療をしない方が好しいと考える人がいても、訴えられることもあるので本人の宣言がなければ実行することは困難である。慢性の植物人間になった場合に、生物学的生命を維持するための医療の中止を望む方は、特に生前に明らかに宣言して紙面に残しておかれる必要がある。立派な医師が協力してくれた場合に、殺人罪で告訴されることも生じるからである。

以上のようなことは、楽しく活躍しておられる多くの健康な方々にはピンとこないことであろうが、この高度医療の時代には必要なことのように考えられる。一度、ご自身の死にかたをお考え下さい。

